

田中允編

未刊謡曲集

続十七

古典文庫

田中允編

未刊謡曲集

古典文庫

古典文庫第五八九冊

平成七年十二月二十日印刷発行

非売品

編者 田中 允マコト

発行者 吉田 幸一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

集曲謡刊未
十七続

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (三九一〇) 二二七一七
振替口座 〇〇一九〇一九一四五九七番

目次

凡例	……………	五
各曲解題	……………	九
本文		
蓮華潭(小湊)	……………	(九) …… 九七
蓮如新作	……………	(一〇) …… 一〇五
六道	……………	(一六) …… 一二四
若紫浜本本	……………	(一六) …… 一二九
若紫江崎本(若葉)	……………	(一六) …… 一三六
若紫竹中新作	……………	(一六) …… 一四三

和氣清麻呂初稿本	……………	(一九)	…一五〇
和氣清麻呂版本	……………	(一九)	…一六〇
驚完曲	……………	(二六)	…一六七
驚半能版本	……………	(二六)	…一七六
和田酒盛別曲	……………	(三一)	…一七九
わたつみ(志か島)	……………	(三一)	…一九〇
和藤内	……………	(三六)	…二〇〇
和 靈	……………	(三八)	…二〇九
〔追加〕			
扇 塚	……………	(四三)	…二一九
隠岐の掾	……………	(四三)	…二三四
甲斐塚江崎異本(貝塚・三国伝来・蓮如・浄土真宗)	……………	(四八)	…二四四

甲斐塚家蔵異本(全右)……………(四八)……二四九

鹿兒嶋……………(五〇)……二五五

加藤清正……………(五一)……二六六

鐘が渚……………(五二)……二七五

鐘 卷復曲本……………(五九)……二九五

鐘巻道成寺福王流系異本(鐘巻・田舎道成寺・

道成寺・由来道成寺・丹波鐘巻?)……………(六二)……二三三

菊 池別曲……………(六五)……二三三

祇樹園……………(六七)……二三三

清 正……………(七一)……二三九

興 教……………(七二)……二四三

護 法金剛流異本

(護王・護応・娛王・名取・名取姫・名取老女)……………(七三)……三五二

名取 姫明和改正本……………(七三)……三六二

護 法復曲本……………(七六)……三七〇

実 方觀世流復曲本……………(七八)……三七六

櫓 天 狗福王流系異本(櫓が原・愛宕櫓)……………(七九)……三八九

櫓 天 狗明和改正本……………(七九)……三九五

櫓 天 狗復曲本……………(八二)……四〇〇

須 賀 留別曲……………(八六)……四〇八

浅 草 寺……………(九二)……四三二

追記・訂正……………四三九

凡例

一、本文庫の『番外謡曲角淵本』正統二冊計五十二番、『未刊謡曲集』三十一冊計一五二六番、合計一五七八番、『謡曲叢書』三冊、『新謡曲百番』、国民文庫本『謡曲全集』上下巻、国書刊行会本『宴曲十七帖附謡曲末百番』、日本名著全集本『謡曲三百五十番集』、『謡曲評釈』九冊（謡曲叢書本以下は重複曲多く、重複しない総数は約六百番）などの、図書館などで比較的閲覧し易い、まとまった諸本にみられる曲を除き、残余を五十音順に配列して続編とし、この続第十七冊では「蓮華潭」から「和霊」までの十四番と、追加として「扇塚」から「浅草寺」までの二十二番、計三十六番を翻刻した。

二、翻刻はすべて原本通りを原則としたが、私意を加えた所はすべて（ ）でくくった。また各曲解題の所でも、原典を引用した所の中の私註は同様に（ ）でくくった。

三、原典には段落のない場合が多いが、編者の見識で適宜改行した。

四、節付は印刷の都合上省略せざるを得なかったが、稀に節付のない写本もあり、また活字翻刻本しか見当たらない曲は勿論節付省略本であるから、これらは原典に既に節付がなかった曲である。これらの点は解題で触れた。

五、「次第」「一セイ」「舞」などの演出上の重要記号はできるだけ残したが、囃子の打切を意味する「打切」「切」「ウ」、間拍子を意味する「ヤ」「ヤア」「ヤヲ」「ヤヲハ」、地拍子を意味する「トリ」「片地」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

六、「印は原典に固執せず、詞の所（節付のない所）は「節の所（ゴマ譜のある所）」はへを付けて区別した。

七、句点は原則として原本通りにしたが、元来句点は節譜の一種であって（句点は必ずそこで息を一旦切り次を謡えという謡い方の記号）、韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文（節付のある部分）の拍子合わずの所は七五調を基本とする一節を原則として一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句とし、これらの区切の所に編者の見識で句読点を付け

た。この場合原典に句点のある時はそのままにし、句点のない時は読点を付けて区別した。また詞の所も原本が句点を脱していると推察される場合は、これまた編者の見識で読点を付けた。謡本に読点はない。

八、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられるが、清濁いずれか決し難い場合はそのままにした所もあり、また注意すべき所は括弧でくくって私見を述べた。

九、曲名の下の「」でくくった番号は、未刊謡曲集一の最初の曲を一とし、それからの通し番号である。したがって角淵本番外謡曲からの通し番号は、これに五十二を加えればよいことになる。

十、謡曲の専門的な術語については、『未刊謡曲集』三十一附載の拙稿「謡曲の音楽的研究」を参照して頂きたい。但し右の拙稿には校了後、組版の時に印刷所側に過失があり、二二五頁の初行全部を二二四頁の初行に移行して読んで頂きたい。

本巻作製にあたってでも大勢の方々の御厚意による所が多いが、中でも故人で

は飯田豊・石田元季・井上嘉介・江崎金次郎・江島伊兵衛・観世左近・高安六郎・横山杢人、現存の方では、浅見真高・伊藤正義・梶井厚佑（旧名達男）・川口恭子・河村隆司・上妻博宜・竹中宏・堂本正樹・鳥越文蔵・西野春雄・藤城継夫・前西芳雄・松本安雄・吉田幸一の諸氏、また解題中に述べた各公共機関の暖い御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（一九九四年十一月十四日記す）

各曲解題

蓮華潭(れんげたん)別名：小湊。鴻山文庫蔵、大正期か昭和初期頃のコンニャク版観世流節付本によつて翻刻した。法政能楽研究所一九九〇年三月三十一日刊の『鴻山文庫蔵能楽資料解題上巻』三八六頁に、

A-7 刊年不明「蓮華潭」一冊

仮綴半紙本。表紙ナシ。謄写版刷。冒頭に「蓮華潭一名小湊 概説」と題し、房州小湊の蓮華湊の白蓮華の縁起に取材した内容を概説し、第二紙からの本文は十丁。観世流節付。片面七行で直し入。内題下に「□筌作」(□は懷のように読める)と作者名があるが、印刷不鮮明で読めない。昭和13年龍野一雄氏の寄贈本で、同氏の葉書を同置。江島氏が袋に「昭和七年(一九三二)頃、新刊トシテ藤波剛一博士ヨリ贈ラレシモノノ由」と書き付けてあるが、版面劣悪で、大正以前の本かも知れない。

と解題されている。右の龍野氏の葉書(昭和十三年^{一九三六}五月三十一日付)によれば、昭和七年頃藤波剛一医学博士より龍野氏が譲り受けられた新作曲であることがわかる。しかし右の解題(表章氏執筆らしい)によれば、本曲の成立は必ずしも昭和七年頃と決することはできず、二十世紀初頭頃の作と考えるべきであろう。

右の解題では省略されている「概説」は次の通りである。(句読点筆者附加)

相州龍口寺の修行者、春浅き如月(きさらぎ)の頃、房州小湊の蓮華渚に詣で、法尼より御誕生井の奇瑞、又白蓮華咲(き)出(で)たる縁起を聞き、法尼は観音薩埵の化身なるを現したる幽玄微妙の法華經の功力を讃嘆したる新曲なり。

本曲は日蓮上人の徳をたたえるのが目的であつて、能としては面白くなく、全曲現行曲「賀茂」のパロディで、とりわけ初同前の掛合から終曲までは賀茂の詞章を随所に借用している。

蓮如(れんによ)新作。前西芳雄氏の御厚意で頂いた、原稿用紙に書かれた無節付の上演草稿台本(作者三品頼直氏の未亡人所持)のコピーにより、不必要な傍訓を省略

して翻刻した。底本は表紙に「慧燈大師四百五十回忌記念法樂能新作曲蓮如」とあり、その裏に「蓮師の鴻恩を謝し此の一篇を亡き母上の靈前に捧ぐ 釈頼直」とある。更に外題として表紙と同体裁のものがあり、その「蓮如」の下に括弧でくくって「仮称」とあるから、蓮如は仮題であるが、他に異名を見ない。またその外題の左下に「三品頼直作」とある。続いて「予定」と題して「公演、昭和二十四年（一九四九）四月、蓮如上人四百五十回忌法要中、東本願寺の能舞台にて公演。出演者、金剛流宗家一門、其他ワキ方狂言方囃子方。本曲の節付並に型附、金剛流宗家金剛巖氏（先代。一八八六・三・二五―一九五二・三・二二）。試演、京都金剛能樂堂」（句読点筆者附加）とある。これはあくまで予定であつて、前西氏の御調査によれば、現金剛巖宗家（一九二四・二・二三―）も蓮如上演の資料も記憶もなく、当時の京都の笛方の第一人者森田光春氏（一九二六・六・九―一九九二・八・二三）の直談でも、試演も上演もなく、また一九四九年四月二十六日東本願寺白書院前庭舞台での蓮如上人四百五十年遠忌記念能の番組をも示され、それには能は金春光太郎の「東方朔」片

山九郎右衛門の「敦盛」金剛巖の「道成寺」宝生九郎の「鉢木」金剛滋男（現宗家巖）の「土蜘蛛」の五番であつて、「蓮如」は見えないから、結局本曲は試演も本演もなかったと考えられる。思うに、浄土真宗の教徒でもある三品氏としては、その蘊蓄を傾けての力作であるだけに、あれもこれもと盛り沢山になり、その結果は新作にありがちな冗漫曲となつてしまった。しかも本曲は一般にはわかりにくい仏教専門語の多用も招き、また拍子当りには暗いらしく、八拍子に割り付けにくい文章が多出している。新作を上演する側^がに立つて考えると、長くて難語の多い文章は覚えにくくて大変な努力を要求される。また拍子合の所は八拍子に割付けるのがむずかしく、面白い型附ができる詞章にも乏しい。これでは何でもこなせる万能選手の先代巖宗家といえども、一定期間内に上演を果すことは甚だ困難であつたと思われる。また長文なので演奏時間も長くなる。この辺が上演中止の主なる原因ではなからうか。

それはともかく、草稿台本は引続き「人物」と題して、「ワキ、念仏者〔僧体ニ非ズ、普通ノワキ〕。前シテ、老翁〔道西坊善従の亡霊〕。前ツレ、老尼〔善

従の妹、妙讃尼の亡霊」。狂言、所の者。後ツレ二人、天女二人〔子方ニテモ可〕。後シテ、天人〔觀世音菩薩の化身〕。時、春三月。所、山城〔の〕国山科本願寺。能柄、五番目物。」〔句読点筆者附加〕とある。更に、「装束付〔試案〕」と題して、「前シテ〔老翁〕、面小牛尉、尉髪、襟浅黄、着附小格子厚板、茶水衣、白大口、腰帶、扇、数珠ヲ持ツ。前ツレ〔老尼〕、面姥、髪、花帽子、襟白、着附摺箔、無色唐織着流、数珠、花籠ヲ持ツ。後シテ〔天人〕、面増、天冠〔白蓮ヲ戴ク〕、髪、髪帶、襟白、着附摺箔、舞衣、緋大口、腰帶、扇。後ツレ〔天女二人〕、面連面、髪、髪帶、黒垂、天冠、襟赤、着附摺箔、紫長絹、緋大口、腰帶、扇。〔天女舞ノ後ニ散華用ノ華籠ヲ持ツ〕。ワキ・狂言、装束常ノ如シ」〔句読点筆者附加〕とある。

また本文の終りに「昭和二十三年〔一九四八〕八月三十日欄筆」とあるから、草稿本完成の年月日もはっきりしている。更に「跋 頼直」として、

東本願寺から蓮如上人四百五十回忌の記念法樂能に就て、謡曲「蓮如」の新作の依頼を受けたのは、昨秋〔一九四七〕十一月のことであつた。然し当時は病

状も香しくなく、殊に寒い冬に向ふ折のこと、て到底執筆の勇氣もなく、完成する自信も更に無かったので一応お断りしたが、其の後大谷大学長大谷瑩誠連枝よりの勸奨もあり、且つ又私が蓮如上人とゆかりの深い江州蓮生寺の二男坊として生れ、大谷大学の国文科で謡曲を専攻し、卒業後も觀世家に關与して永く能樂の研究をつゞけて來た自分として、今度の此の仕事は誠に願ふてもなき倅(しあは)せと言ふべきだと思ひ直して、兎も角畢生の努力を払ひ、生死を超越して一つやって見ようと病床ながら大勇猛心を起したのであつた。併し病状は果して面白くなく、大寒の頃と七八月の酷暑の頃と二回病勢惡化し、執筆はおろか睡眠食事さへも思ふやうに撮れない時があつたが、前後十ヶ月の日子を経て、その間小康を利用して少しづつ書き続け書き足しなどしつゝ、漸く八月三十日先妣の命日に不十分ながらも完成する事が出來たのである。十ヶ月の間病苦と闘(たたか)ひながら兎も角曲りなりにも纏(まと)め上げ得たことは愉快でならない。仏祖の恩寵と亡母の加護を思はずには居られないのである。然しこの僅か十ヶ月の間に、私を激励して下